

肢体不自由当事者 X 氏のライフストーリーにみられる エンパワメント過程の分析

—M-GTA とエピソード記述法を用いた記述—

岩川奈津 (愛知教育大学教育学研究修士課程)
佐野真紀 (愛知教育大学福祉講座)

要約 障害のある当事者の生活史をインタビューにより聞き取り, その語りからエンパワメント過程を記述する試みがなされてきている。当事者の経験したエンパワメント過程の多様性を明らかにするためには, 研究件数をより一層増やしていくことが望まれる。そのためには, 障害のある人の生活史についての語りから, その人ならではのエンパワメント過程を記述するための分析方法が必要である。先行研究を比較検討し, M-GTA とエピソード記述法を実施し結果を組み合わせる分析方法を仮定した。この仮定の下, 肢体不自由の当事者である X 氏に協力を得て, 以前に収集していたインタビューデータを再分析した。その結果, 複数の分析方法を組み合わせるほうが, 単一の分析方法のみ実施するよりも, 調査協力者のその人らしさを反映したエンパワメント過程の記述が可能となった。

キーワード: エンパワメント 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ エピソード記述 自立生活

I. 用語の表記とエンパワメントの作業定義

エンパワメントには複数の表記の仕方があるが, 本論に先立って, 用語の表記と定義について述べておきたい。本稿では引用部分を除いて「エンパワメント」と表記する。エンパワメントは状態を示す語として用いる。動詞的に用いる場合は「エンパワー」と表記する。エンパワメントと逆方向に向かう動きを「ディスエンパワー」と表記し, ディスエンパワーした状態を「ディスエンパワメント」と表記する。

エンパワメントの定義は未だ統一がなされていない。本稿では, 論を進めていくために, 「エンパワメント」という語が意味するところを作業定義として次のように規定する。

エンパワメントは, 辞書的には「権限を与えること, (少数派集団 [民族] に与える) 政治権力の強化, 能力を高めること, 権限付与」(小西・南出 2007) といった意味を持ち, 実際には自己肯定感の獲得, 生活の自己コントロール, 社会的な影響力の獲得など様々な様相を見せる生活上のプロセスとする。

また, エンパワメント概念のとらえ方は, ソーシャルワークの専門職の立場からエンパワメントを捉え意味づけようとする立場と, 当事者の立場からエンパワメントを捉え意味づけようとする立場 (セルフ・エンパワメント) に大別できるとする(橋本卓也ら 2008)。

II. 問題と目的

エンパワメントは, ソロモン (Solomon 1976) が 1950-60 年代のアフリカ系米国人の公民権運動とのかかわりから, 1976 年の著作の中でエンパワメントを定義したことによりソーシャルワークの概念として成立した (小松 1995 など多数)。

その後のエンパワメント研究の発展過程については, 岩川・都築 (2017) で整理した。1980 年代までに様々な研究がなされ多様なエンパワメントの解釈が提起され, 1990 年代までにエンパワメント概念の体系化が試みられた。2000 年代には, セルフ・エンパワメントの視点が重視され始めた。セルフ・エンパワメントはアダムスによると, 自分の生き方を決める, 自分を成長させる, 自分を教育する, といった方法で自分に働きかけ, 自分自身でエンパワメントしていくことを指している。それと同時に, セルフ・エンパワメントは, 当事者の立場からエンパワメントを捉え意味づけようとする立場でもある。(Adams2003=杉本・齋藤 2007:58-59)。

我が国においても, 2000 年代以降にセルフ・エンパワメントの視点を持つ研究がなされ始めた。障害福祉領域においては, 当事者の語りを分析しエンパワメント過程や特徴を明らかにする試みがなされた (武田 2005, 橋本ら 2008, 辻・大西 2012 など)。

これらの研究の特徴は, 当事者の語りを重視し, 語りからエンパワメント過程を明らかにしようとする視点である。このような視点を持つことは, 一人ひとりの語りに基づいたその人ならではのエンパワメント過程を表現することを可能とする。エンパワメントの定

義づけや解釈のバリエーションを、大幅に広げる可能性を持つと考えられる。

以上のように、当事者の語りからエンパワメント過程を分析し、当事者の側からエンパワメントを定義づけることには意義がある。しかし、その意義を果たすためにはこれまで以上に研究件数を増やすことが望まれよう。当事者が経験したエンパワメント過程の多様性を示すには、より多くの当事者に協力を得て、その人ならではのエンパワメント過程を記述することが不可欠である。

研究を促進するためには、収集した語りの分析方法を検討する必要があると考える。エンパワメント過程を記述するには、生活史についての語りを収集し、それをエンパワメント過程として再構成する必要がある。生活史をそのまま提示するのではなく、生活史の語りを、その人のエンパワメントのストーリーとしてまとめる分析作業を要する。

先行研究では、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下 M-GTA とする) を活用した分析 (橋本ら 2008)、エピソードごとに記述・分析する方法 (辻・大西 2012) などが採用されている。しかし、生活史からエンパワメント過程を導き出す分析方法は確立された方法はないようである。先行研究の試みを分析方法という観点から検証し、ある人の生活史から導き出されるエンパワメント過程をありありと記述し得る分析方法を開発することが必要である。

そこで本研究では、障害のある人の生活史についての語りからその人ならではのエンパワメント過程をわかりやすく記述するための分析方法を検討・試行し、多様なエンパワメント過程を明らかにする質的研究の方法を探ることを目的とする。

II. 方法

1. 先行研究の比較検討

前述したように、障害のある人の生活史についての語りからエンパワメント過程を導き出す分析方法は、いくつか試みられている。本章では、異なる分析方法を採用した 2 つの先行研究を比較する。

① M-GTA を用いた分析方法 橋本ら (2008)

橋本ら (2008) は、頸椎損傷や脳性麻痺による重度障害がある調査協力者 6 名に生活史についてインタビュー調査を実施し、重度肢体不自由者のエンパワメントの内的生成要因を検討した。6 事例を一括して M-GTA により分析している (橋本ら 2008)。

橋本ら (2008) の研究から、M-GTA によってエンパワメント過程を分析した場合の長所と短所を検討する。

橋本ら (2008) の研究は、分析者が研究目的に沿ってデータをまとめた場合どのような結果となるかが理

解しやすくなっている。調査協力者たちはいろいろな経緯を経てエンパワーするのだが、その中でも特にきっかけとなった要因を紐解こうとした試みである、という研究の意図が読み取りやすい。分析者の視点や解釈の内容がわかりやすいことが、M-GTA を用いた分析方法の長所といえる。

しかし、橋本ら (2008) の研究結果からは、調査協力者たちの個別性、“肢体不自由のある当事者ならではの”という部分が読み取りづらい。分析結果として示されている内的生成要因はすべて、従来のソーシャルワーク研究で指摘されてきた内容と類似している。カテゴリ化の作業の過程で最大公約数的な意味が残され、調査協力者ならではの要素や意味づけがそぎ落とされてしまったのではないか。これが M-GTA を用いた分析方法の短所と考える。

② エピソードを記述し分析する方法 辻・大西 (2012)

辻・大西 (2012) は、思春期に途中で弱視となった調査協力者 1 名に生活史についてインタビュー調査を実施し、エンパワメントの過程を記述した。生活史の語りからエンパワメントに関連する語りをエピソード単位で抽出し、エンパワメント過程としてまとめている (辻・大西 2012)。

辻・大西 (2012) の研究から、エピソードを記述する方法によってエンパワメント過程を分析した場合の長所と短所を検討する。

辻・大西 (2012) の研究は、記録されたエピソードは調査協力者の語った言葉がそのまま使用されている記述が多く、専門知識によってまとめられていないその人ならではのエンパワメント過程をうかがい知ることができる。分析結果として示された調査協力者のエンパワメント過程の段階やテーマにも、既存の解釈にはない表現が見られた。分析者が読み取った、調査協力者の“その人らしさ”を表現しやすいことが、エピソードを記述する方法の長所といえる。

一方で、エピソードを記述する方法にも短所はある。第一に、読み手は膨大なテキストをすべて読まなければその人のエンパワメント過程を知ることができない。第二に、記述を詳細にすればするほど、分析者の解釈や重視する部分がわかりにくくなる。この 2 点は、読み手が書き手と同じように調査協力者のエンパワメント過程を理解することを難しくさせてしまう。これがエピソードを記述する方法の短所と考える。

3 つの方法の長所と短所は、次の表のようにまとめられる。

表1 2つの分析方法の比較

| | M-GTA | エピソードを記述 |
|---------|-----------|----------|
| 分析者の視点 | わかりやすい | 労力がかかる |
| そのひとらしさ | 失われるおそれあり | 表現しやすい |

それぞれメリット・デメリットがある2つの分析方法だが、メリットを図のように色付けすると、補い合っている関係にあるといえる。2つの方法を組み合わせることで、効果的な分析方法となるのではないかと仮定できる。この仮説を基に、障害のある人の生活史についての語りからエンパワメント過程を導き出す調査・分析方法を次のようにデザインした。

2. 方法

①調査方法

ライフストーリー・インタビュー(桜井・小林 2013)により行う。ライフストーリー・インタビューは「調査する一人ひとりがインタビューをとおしてライフストーリーの構築に参加し、それによって語り手や社会現象を理解・解釈する共同作業に従事することである」(桜井・小林 2003: 7-8)と考える調査方法である。語り手と聞き手の対話を重視し、調査協力者の自由な語りを引き出すことが可能となる。エンパワメント過程を当事者の語りに基づいて聞き取るために最適の調査方法と考え、採用した。

インタビューは半構造化面接の形式をとり、生活史を語っていただく。筆者の態度は聞くことを重視するが、語りの流れに沿って質問することは禁止しない。エンパワメントをテーマとした質問は、あらかじめインタビューガイドとして用意し、必要時に活用する。

②分析方法

第一に、インタビューデータを基に、エピソードを時系列に整理し、ライフストーリー年表を作成する。項目は年齢・生活の場・出来事とした。ライフストーリー年表は、調査協力者の生活史の概要を整理し理解しやすくするために用いる。

第二に、インタビューデータをM-GTA(木下 2013)とエピソード記述法(鯨岡 2010)の2つの分析方法によって分析する。

M-GTAは、木下康仁による質的研究の手法の一つである。社会的相互作用の分析に適しており、社会福祉領域をはじめとするヒューマン・サービス領域の多くの研究で採用されている(木下 2013: 7-68)。分析手続きは、類似の意味を持つデータを取り出してグループ化し、カテゴリーに整理することで理論生成を行う。ただし、画一的なデータの切片化は行わない特徴がある(木下 2013: 39-42)。M-GTAは、ヒューマンサービス領域の社会的相互作用の分析に適している分

析方法であり、本研究の事例検討の分析方法としてM-GTAは適当であると判断し、採用した。

エピソード記述法は、鯨岡峻による質的研究の手法の一つである。鯨岡(2010)によると、臨床現場という「多様な『人の生の実相』が体験される場」において観察者が出会った「強く情動が揺さぶられたり、深い気づきが喚起されたりする忘れがたい体験」を「生き生きと描き出し」、他者に伝えるための方法として開発された(鯨岡 2010: 3-8)。こちらは辻・大西(2012)の採用したエピソードを記述する方法とは異なるが、当事者の語るエピソードをありのままに記述する方法として最適であると判断し、採用した。

分析対象とするデータは、どちらの方法においても逐語録とする。分析時の補助資料として、ライフストーリー年表とインタビュー時のフィールドノートを使用する。今回は、M-GTAによる分析を行った後に、エピソード記述法による分析を行った。

Ⅲ. 事例検討：X氏のライフストーリー・インタビューの分析

1. インタビューの実施と倫理的配慮

今回の事例検討は、20XX年に筆者が卒業研究にて収集したインタビューデータを再分析したものである。20XX年時点と本研究時点の調査の状況と倫理的配慮を示す。

20XX年：調査はライフストーリー・インタビューによって行った。インタビューの記録は調査協力者本人の了承を得て、インタビュー内容をICレコーダーに録音し、適宜メモを取った。面接時間はX氏の話の区切りのよいところで終了した。面接は20XX年8月～11月に4回実施した。毎回の平均面接時間は2時間程度であった。インタビュー実施にあたって、研究の趣旨、目的、プライバシーへの配慮、倫理的配慮について説明し、調査協力の依頼をした。研究目的は、重度訪問介護を利用する人のライフストーリーを調査しエンパワメント過程を明らかにすることであった。説明の後に、同意書に本人の指示による介助ヘルパー代筆のサインをいただき、インタビュー協力への同意を得た。インタビュー後にデータをエピソード記述法によって分析し、分析終了後、X氏に分析結果を開示した。X氏本人から研究の公開について了承を得た。

本研究：20XX年のインタビューデータを再分析するにあたって、X氏に再度、調査協力の依頼をした。研究の趣旨、目的、プライバシーへの配慮、倫理的配慮について説明した。説明の後に、同意書に本人の指示により筆者代筆のサインをいただき、同意を得た。再分析終了後、X氏に分析結果を開示した。X氏本人から研究の公開について了承を得た。

2. 調査協力者

X 氏, 40 代男性である。X 氏には頸椎損傷による肢体不自由がある。受傷時期は 10 代である。自身の意思で手指を動かすことができるが, 生活動作はほぼ全介助を要する。移動は電動車いすを操縦している。言語障害はない。

X 氏を調査協力者として選出した理由は, 生活史においてディスエンパワメント, エンパワメントを両方経験していると予想されたからである。X 氏は講演で自身の生活史について語っている。講演では, 抑圧的な環境下での入所生活, 重度訪問介護を利用した地域での一人暮らし, ヘルパーステーションの所長としての活動について語られた。筆者はこれを受講し, X 氏の経験からはエンパワメント過程を見出すことができるのではないかと考え, インタビューの協力を依頼した。

3. 分析結果

(1) ライフストーリー年表の作成

X 氏のライフストーリー年表は, 表 2 のようにまとめられた。

表 2 X 氏のライフストーリー年表

| 年代 | 生活の場 | 出来事 |
|-----------|------------|---|
| 0 歳～小学生 | 実家, 地域の小学校 | 地域の学校に通う。水泳が得意だった。 |
| 中学生 (受傷前) | 実家, 地域の中学校 | 身体が動きづらくなるといった症状が出始める。 |
| 受傷時 | 入院 | 病院で検査を受ける。検査に関連する手術の後, 受傷。 |
| 中学生 (受傷後) | 実家, 地域の中学校 | 一年生のうちは担任の先生の力を借りて登校した。進級後教室の階数の変更などで登校が困難となり, 学校に通わなくなった。中学校卒業時には県内に登校可能な進学先がなかった。 |
| 15 歳～20 歳 | 他県の入所施設 | 県外の病院に入所し, 高校の通信制教育を受ける。病院の生活で初めて「縛り」を自覚する。ケースワーカーから勧められ, 退院する。 |

| | | |
|-------------------|-------------------|--|
| 20 代 | 県内入所施設, 実家 | 県内の施設に期限付きで入所し, 実家に戻った。施設で当事者の先輩と知り合い, 自立生活している様子を見る。友達と外出したり, 車いすサッカーなどの趣味を楽しんだ。 |
| 30 代前半 | 実家, 県内入所施設, 福祉ホーム | 実家での生活に疑問を持ち始める。福祉ホームで自立生活プログラムを受ける。福祉ホームで自立生活の基本スタイルを作った。当事者の友達と遊ぶなど, 楽しいことを経験しながら自立生活を覚えた。 |
| 30 代後半～40 代 (取材時) | 自宅 (一人暮らし) | 障害者運動に関わり始めた。ヘルパー事業所を立ち上げ, 所長になった。地域で一人暮らしを始めた。 |

(2) M-GTA の結果

逐語録を分析し, 概念の廃止・統合の結果, 最終的に 9 つの概念が生成された。概念は 6 つのカテゴリーに分けられた。カテゴリーの相互関係を検討した結果, X 氏がエンパワーするしくみが導かれた。これをモデル図 (図 1) としてまとめた。

X 氏のライフストーリーには, 自分が経験した出来事と, 自信と, 行動が影響し合っていることを示す語りが繰り返し現れた。例えば X 氏は, 「自分のことが好きですかって言われたら, こんなに頑張ってるな, でも出来んことがあるな (と思う)。全部自分のことが好きって人はなかなかいない。でも, サッカーで点入れたら自分を褒めたいし。それはもうどや顔になるし。積み重ねていって, (自分が) 好き, っていうのができるんだろうね。経験を積み重ねて。」と語っている。これを経験⇔自信⇔行動のサイクルとした。

このサイクルは, エンパワメント・ディスエンパワメントに向かわせる要因の影響を受けていた。例えば, X 氏は 30 代後半でヘルパー事業所の所長に立候補する時に, 「ほとんど悩まなかった」という。その理由には, 福祉ホームの生活を通して得た経験によって自分が所長となるビジョンが作られていたからだ, ということである。これは, X 氏が福祉ホームでの経験を通して, 事業所立ち上げができるというビジョン (つまり自信) を得たことで, 所長になるという行動を起こすことが可能になった, 経験⇔自信⇔行動のサイクルがエンパワメントの方向に働いた例と考えられる。一方で, ネガティブな作用を強め合う場合も語られている。X 氏は, 介助付き自立の考え方を知ったばかりであった 20 代に自立生活を始めなかった理由として,

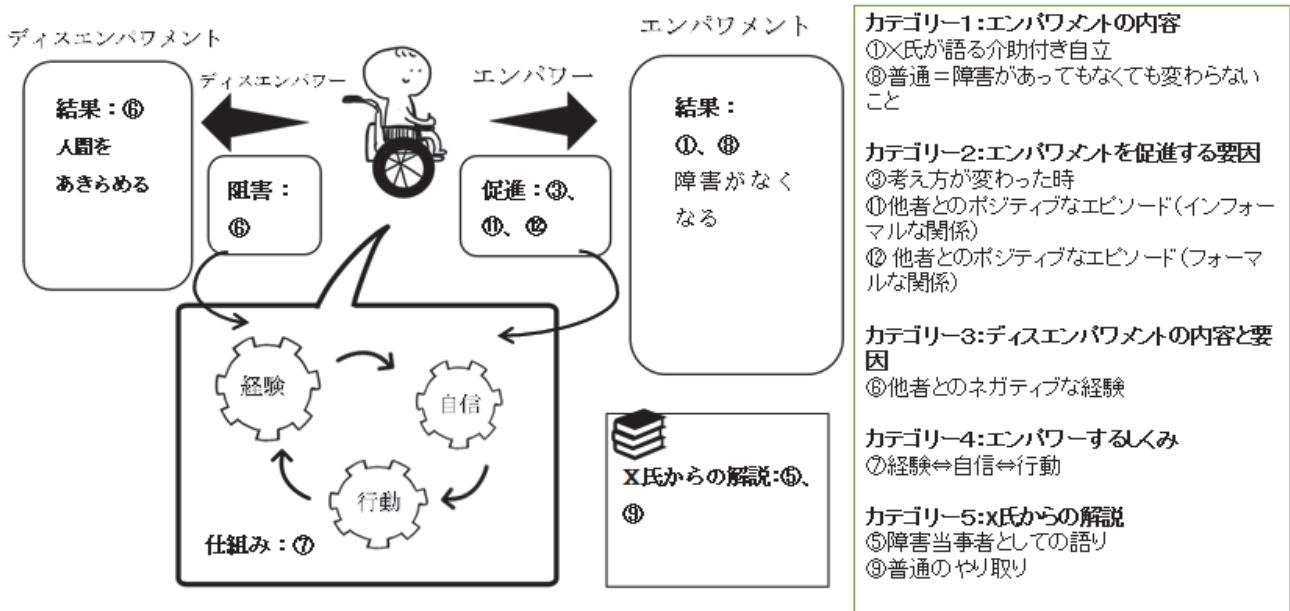


図 1 M-GTA 分析の結果

当時の気持ちを「とにかく無理」と思ったと述べている。これは、介助者を利用した経験の乏しさから自信がなくなり、行動の幅を狭めてしまった、経験⇔自信⇔行動のサイクルがディスエンパワメントの方向に働いた例と考えられる。X氏はどちらの状態に向かうときにも、同じ経験⇔自信⇔行動のサイクルという仕組みで変化していた。

(3) エピソード記述法の結果

エピソード記述法を用いて逐語録を分析した。20XX年時にすでにエピソード記述法による記録と考察を記述していたが、逐語録に基づいて再度、記録部・考察部を記述した。ただし、調査時から時間が経過していたため、逐語録の同じ部分についてエピソードを記述している場合には、記録部の内容が20XX年時と大きく異なっていないかを照らし合わせた。今回は、20XX年時に取り上げていないエピソードは記述されなかった。確認作業は記録部の作成終了後に行い、その後、考察を行った。結果、2つのエピソードが記述された。それぞれのエピソードの記録部分と考察のうちエンパワメント過程に関わる部分を要約して示す。

エピソード①:「ま、いっか」と思う気持ちがパワーレスの内在化につながる

概要

筆者はX氏に、これまでにディスエンパワメントした状態を感じたことがあるか尋ねた。X氏は病院での入所生活を挙げて、その様子を教えてくれた。筆者は、X氏の語りには怒りの感情が伴っていることに気づいた。はじめ筆者は怒りの感情は、病院の規則や制度に向けられているものと考えた。しかし、X氏は「怒り」は職員から受けた「精神的拘束」に対してのものだと答えた。「精神的拘束」とは、職員から「モノ以下」に

扱われることだという。筆者は、それは確かに怒るべき経験だ、と納得した。

次にX氏は、規則や制度などの「縛り」を受ける生活には、実際には「怒り」とは異なる思いを抱くと教えてくれた。その思いとは、「ま、いっか」という気持ちだ。この気持ちをすぐに理解することは難しく、詳しく教えてほしいと伝えた。X氏は、「規則に合わせて生活をするのに慣れちゃう。本当は慣れちゃいけないんだけど、慣れちゃう。それで、(病院の一日の生活リズムに慣れてくると)『ま、いっか。これでいっか。』と思っちゃう。」「でも、規則や時間の縛りに慣れちゃうと、(患者が)だんだん人として見られなくなってくる。そして、患者自身も、自分が人間として見られなくなってくる。ずーっと施設で規則に慣れて生活していると、『ま、いっか』と思う。施設の中で人間をあきらめちゃう。」と説明してくれた。筆者は抑圧を内在化した状態と理解し、X氏から概ね同意を得た。

考察

エピソード①が喚起する意味を検討し、3つの意味が考察された。

意味①-1:ディスエンパワメントのエピソードに「怒り」が付与されている

X氏にとってのディスエンパワメント(パワーレス)のエピソードには、「怒り」の感情が付与されているものが含まれている。

筆者がこのエピソードを取り上げたのは、ディスエンパワメントに関するイメージとX氏の語りとの間にずれを感じたからである。エンパワメントについての先行研究等の言及から、ディスエンパワメントのイメージを、「従属させられる・受動的・打ちひしがれている」といった、「いかにもパワーが無さそうな状態」として想定していた。一方で、怒りの感情のイメージは、ネガティブでありながら、行動を喚起することも

ある、「よし悪しは別にして、パワーはある状態」であった。

X 氏がディスエンパワメントのエピソードとして「怒り」のエピソードを語ったことそのものを振り返ると、「モノ以下の扱い」をされていたことは、当然怒りをもって受け止められると納得できる。X 氏は、職員との間に存在する圧倒的な力関係を見せつけられ続けた。ディスエンパワメントのエピソードに怒りがついてくるのは当然である。

意味①-2: ディスエンパワメントのもう一つの顔、「ま、いっか」という側面

X 氏がディスエンパワメントについて語ったもう一つの要素である「ま、いっか」という気持ちもまた、重要な意味を喚起する。「ま、いっか」は、規則への慣れと、患者と職員が互いにそれだけの存在としてしか見られなくなってゆく過程を表している。

筆者は X 氏から「ま、いっか」という言葉を聞いたときに、やはり違和感を感じた。ここでも、筆者の捉え方と X 氏の意味するところにはずれが生じていた。筆者は、「ま、いっか」に対して、X 氏が施設に対して肯定的な見解を示していると受け取った。しかし、X 氏が真に表現していたのは、知らず知らずのうちに自らがディスエンパワメントに向かわされていることに気づかない（あるいは、気づいていてもどうにもならない）時の自身の状態であった。

これも、X 氏の病院生活が常に縛りを受けた生活であり、その日その日乗り切るには管理された生活に自分を最適化しなければならなかった状況を想像すると、「ま、いっか」という表現に納得がいく。たしかに、縛りに慣れることは、人間的に間違っている、慣れてはいけないことである。しかし、今日を何事もなく終えることは、縛りに慣れることなしにはできない。そのような状況下で生きていくために、本当のことは一旦わきに置いて、「ま、いっか」と慣れていくことは、十分に起こりうると思える。また、その時に感じる「ま、いっか」が持つのは、問題を留保するという停滞の意味だけではないことが想像される。「とりあえず、今日も一日終われたじゃないか」、「こんな環境だけど、なんとかやり過ごせたじゃないか」という、自分に対してのねぎらいとしての意味も込められているのではないだろうか。

X 氏の言う「ま、いっか」という言葉は、抑圧によるディスエンパワメントを内在化する過程の実際について示唆を与える。抑圧に慣れディスエンパワメントを内在化することは、抑圧の下で生活を送る人にとっても、「本来あってはならないこと」「間違っていること」として認識されている。しかし、抑圧の下で生活を成り立たせるためには、慣れることこそが有効である。今日を乗り切るために、抑圧に慣れなければなら

ない時、人はその状況を「ま、いっか」と受け入れざるを得ないことがある。

意味①-3: なぜずれたか?

なぜ「怒り」や「ま、いっか」について理解するのに、時間と質問のやり取りを要したかという点にも注目できる。

エピソード①全体を振り返ってみると、X 氏の経験に対する切実さの違いがずれを生み出していたのではないかと考えられる。X 氏の経験は、X 氏にとっては唯一無二のもの、自分自身を作るものである。しかし、筆者は X 氏の経験の語りを聞きながら、X 氏という個人を飛び越えて、「重度障害のある人」や「施設入所をしている人」といった個人よりも普遍化された人々を意識していたのではないかと。だからこそ、エンパワメント理論から想起されるディスエンパワメントのイメージに合わない「怒り」や「ま、いっか」という言葉はすぐに理解することが困難であり、X 氏とやり取りを重ねることが必要だった。

X 氏のライフストーリーを聞くうえで、このような普遍化を急ぐ構えは、反省されるべきものである。しかし、この構えから生じたずれをきっかけに、ディスエンパワメントについての X 氏の語りが深まっていったことも事実である。目の前のその人のライフストーリーに向き合うという姿勢の重要性を再認識するとともに、それでも「ずれ」が生じた時には率直に問いかけることが重要であることもまた、気づかされる。

エピソード②: 「普通のやり取り」の大切さ、「葉っぱをかける」というエピソード観

概要

筆者は X 氏がエンパワメント過程のキーパーソンと予想される施設職員のエピソードを聞いた。しかし、X 氏はキーパーソンとして当事者の先輩 D さんを挙げた。X 氏は、D さんからは相当「発破をかけられた」と語る。X 氏の楽しそうでいきいきとした表情から、D さんが重要なキーパーソンなのだろうと感じられた。その一方で、D さんの働きかけは一般的な年長者のふるまいと感じられ、何がキーパーソンとされる理由なのかつかみきれない思いも感じた。そこで、筆者はそれを率直に伝えた。すると、X 氏は「普通のやり取り」ができた人であるからだ、と教えてくれた。

「普通のやり取り」は、障害が前提とならない関係性の他者とのやり取りのことである。X 氏は、社会における「一般的な定義からは、障害者の人たちにとって必ず、上から見られる」と指摘し、障害のある人にとって「もう、健常者は、こわいもの。指導してくるもの。前提としてある。だから、普通のやり取りってのが、俺の中での… (大事なものとして) ある。」と説明してくれた。筆者は、X 氏の説明を聞いてはじめて、最初は重要性を感じなかった一般的な「普通の」言葉かけがいかに大切だったかを理解した。X 氏は、上から目

線を受け、普通の人間関係を作ることが難しい状況にあると感じてきた。だからこそ、一般的な「普通のやり取り」を大切にしているのだ、と理解した。

この後 X 氏は、発破をかけられるのが好きだと話してくれた。「葉っぱってそのうち養分になるでしょ。発破をかけられるって言葉好きやなあと思う。そういう（普通の）やり取りがあってこそなのかなということもある。当事者の立場から、そういうやり取りをするのが。」と語った。この語りは X 氏自身も思いつきながら話しているようだった。明解な説明ではないのだが、これを聞いて、発破をかけるという言葉が持つ X 氏独自の意味が分かった。発破（葉っぱ）をかけることは、X 氏という木の、栄養になる経験をするのであった。経験したその時すぐに役に立つのではなく、そのうち栄養になるような性質を持っている。筆者は「葉っぱ」という独特な表現が、X 氏のライフストーリーの根底にある価値観のように感じた。

考察

エピソード②が喚起する意味を検討し、3つの意味が考察された。

意味②-1:「普通のやり取り」の重要性

第一に注目されるのは、X 氏にとって「普通のやり取り」が重要な意味を持つことである。この意味は、なぜ D さんがキーパーソンなのか、という疑問を通して明らかになった。この疑問が生じた背景にも、筆者と X 氏の視点の間に生じた「ずれ」がある。

表面的なずれは、キーパーソンと考える人物の違いである。筆者は、X 氏に自立生活を意識させた職員だと予想し、X 氏は普通の先輩後輩関係にあった D さんだと語った。そして、この違いを生じさせた根本にあるずれは、筆者と X 氏の「普通のやり取り」の重要性への認識の違いである。筆者は、X 氏にとって重要な「なにか特別な出来事」があるだろうと思っていた。しかし X 氏は、日常の中で経験される「普通のやり取り

り」こそが重要であると考えていた。

このずれは、X 氏の「障害者は上から見られる」という説明によって軽減された。X 氏は、障害者であることによっていびつな人間関係にさらされる。障害者であるというだけで、上から目線で見られる。このようないびつな関係性が結ばれやすい状況下であって、それでもなお「普通のやり取り」を持てることは、X 氏にとって重要な意味を持つと納得できる。

意味②-2: 障害のある・なしからくる「土俵の違い」と「わかる」ことの限界

第二に注目されるのは、X 氏が指摘した障害のある者とない者の「土俵の違い」と「わかる」ことの限界である。この意味は、D さんが当事者だったことの意味を問う過程で、X 氏から提起された。

X 氏は、「普通のやり取り」を持つ相手は当事者以外にもありうることを示しつつも、やはり「わかる」「共感する」という関係性は当事者同士以外にはあり得ないと説明している。また、それは障害のある者ない者がそれぞれ立つ「土俵の違い」による限界であって、非当事者が努力しても当事者同士の「わかる」関係性に行きつくことはないを指摘している。非当事者が当事者を「わかる」ための努力をした結果到達する可能性のある関係性は、「よりそう」関係であると示している。

筆者は、X 氏が言う「わかる」は、自分のことのように理解できること、身体感覚を伴ってその人の経験を追認できることを指していると解釈した。そのように考えると、私には障害がない、X 氏にはある、という身もふたもない違いによって X 氏の経験を自分のことのように「わかる」ことは無理であると素朴に同意できる。

意味②-3: 「葉っぱ」としてエピソードを見る

第三に注目されるのは、エピソードを表す「葉っぱ」という表現である。これは、D さんが「発破をかけて

図 1: X 氏のセルフ・エンパワメントのスタイル (三つの營養を動力源にするセルフ・エンパワメント式車いす)

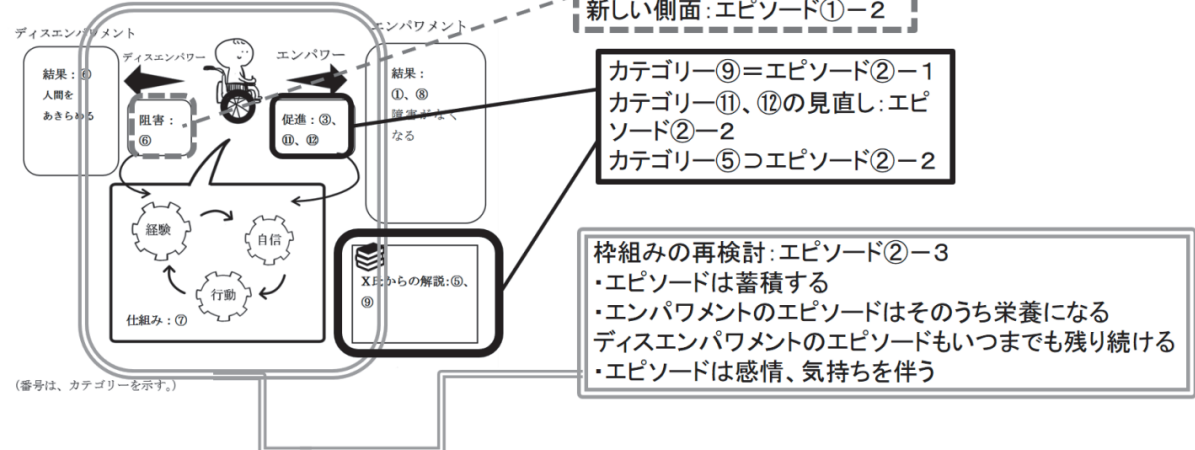


図 2 2つの分析方法の比較

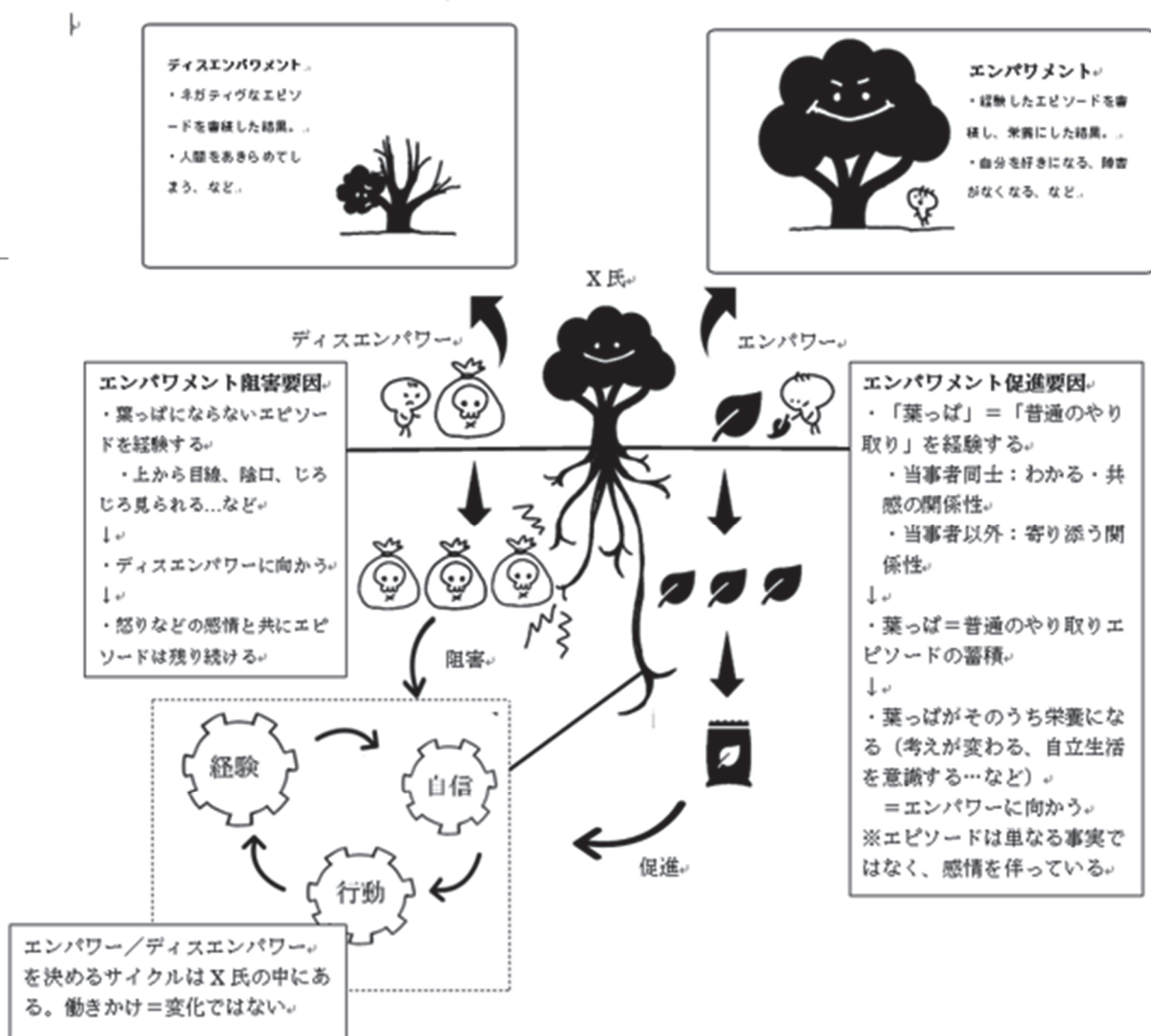
くれた」ことと「普通のやり取り」の重要性を語る時に、X 氏が思いついた表現である。「発破」と「葉っぱ」をかけた言葉遊びの表現である。この表現によって、D さんの発破をかけてくれたエピソードに代表される「普通のやり取り」のエピソード群が、「葉っぱ」という名前のついた X 氏にとって重要な意味を持つ種類のエピソードで群であることがわかる。「葉っぱ」は、X 氏のライフストーリーやエンパワメント過程を解釈する上で、エピソードの見方に重要な視点を与える言葉である。「葉っぱ」が意味するエピソードの見方は、次のように考察される。

まず、エピソードは「そのうち栄養になる」性質を持っている。X 氏にとって、他者との間に経験されるエピソードは蓄積され、しばらく時間がたった後に効力を発揮することである。葉っぱがかけられた時には栄養にはなっていないのと同じように、エピソードが経験されているその時には、エピソードに含まれているなにかの働きは機能していない。葉っぱであるエピソードが栄養になるのは、X 氏がそのエピソードを振り返り、何らかの得るものを実感した時である。

次に、X 氏のライフストーリーは、葉っぱをかけてこそ、のものである。「葉っぱ」になる「普通のやり取り」のエピソードは、すぐには効果を発揮しない。このような遅効性のエピソードを X 氏は重視している。一方で、例えば肥料のような、その時すぐに役に立つことを目指した関わりの重要性は、この場面でもインタビュー全体を見ても語られていない。これは、注目されるべき点である。その時すぐに役に立つことを意図した関わりではなく、素朴な「普通のやり取り」としての関わりが X 氏にとって重要な意味を持っている。

最後に、「葉っぱ」とは対照的な働きをするエピソード群の存在が示唆される。X 氏にとって、他者との間に経験される「普通のやり取り」のエピソードは、葉っぱのようにかけられ、降り積もってゆき、いずれ栄養となるものである。そうだとすれば、葉っぱ以外のものも、X 氏はライフストーリーの中でかけられている可能性があるのではないか。このような視点に立つと、例えば、エピソード①のようなディスエンパワメントのエピソードは、ごみや石ころのように蓄積され、いまだ消えずに残っているのだと捉えることができる。このような捉え方をすると、X 氏が強烈な怒りと共にエピソードを語ったことが腑に落ちる。X 氏に

図 3 X 氏のセルフ・エンパワメント過程



とって職員からの「精神的拘束」のエピソードは、段々と遠く薄くなっていくものではなく、いまだに分解されない異物であるから、当時を語る時に「怒り」が再現されたのである。

(4) M-GTA とエピソード記述法の分析結果の比較

以上のように、2種類の分析法を用いてX氏のライフストーリー・インタビューの語りを分析した。

まずは、それぞれの分析結果の特徴を検討する。

M-GTA では、X氏のセルフ・エンパワメントの仕組みをモデルとして整理した。類似のデータをグループ化し、カテゴリーを生成し、相互関係を検討した。これによって、インタビューデータ全体が示すX氏がエンパワーしていく仕組みをモデルとして導き出すことができた。エピソード記述法では、重要なエピソードを取り上げ、喚起される意味を検討した。X氏のライフストーリー上のディスエンパワメント・エンパワメントに関わるエピソードが、X氏にとってどのように捉えられているのかが明らかになった。二つの分析結果は、M-GTA ではX氏のエンパワメント過程の枠組みを明らかにし、エピソード記述法ではエンパワメントに関わるX氏ならではの考え方・価値観を明らかにしたと評価できる。2つの分析結果を詳細に比べると、今回は3つの点について補完し合っていた。比較の結果は次の図のようにまとめられた。

まずは、X氏をディスエンパワメントに向かわせる要因についてM-GTA とエピソード記述法は次のように補い合っていた。M-GTA の結果においては、他者との間に経験されたネガティブなエピソードが、X氏をディスエンパワメントに向かわせていると示された。これはエピソード記述法の結果における意味①-1で示された意味と共通している。

さらに、エピソード記述法の結果によって、2つの要素が付け加えられた。第一には、意味①-1によって、X氏にとってネガティブなエピソードは、打ちひしがれている状態やあきらめの感情を伴うものではなく、怒りの感情が伴うものであると明らかになった。第二には、意味①-2により、X氏をディスエンパワメントに向かわせる要素が付け加えられた。X氏がディスエンパワメントに向かう時には、「ま、いっか」という知らず知らずのうちに自らがディスエンパワメントに向かわされていることに気づかない（あるいは、気づいていてもどうにもならない）状態になっていた。次に、X氏をエンパワメントに向かわせる要因についてもM-GTA とエピソード記述法の結果が補い合う関係を示した。M-GTA では、他者とのポジティブなエピソードを経験することがX氏をエンパワメントに向かわせることが示された。これはエピソード記述法の結果における意味②-1と共通する。

さらに、エピソード記述法の分析により2つの要素が付け加えられた。これはどちらも意味②-2において示されている。第一に、他者とのポジティブなエピソードは、他者と「普通のやりとり」を重ねることであり、それこそが重要であると強調された。第二に、相手が当事者であるか否かで質的に異なる関係性となることが示された。これによって、相手との関係がフォーマルな関係かインフォーマルな関係かで分類していたM-GTA のカテゴリー⑪、⑫は適当でない可能性が示唆された。

最後に、M-GTA の結果には含まれない結果がエピソード記

述法の意味②-3によって示された。X氏はエピソードを「葉っぱ」と表現し、独特のとらえ方をしていた。X氏にとって、エピソードは、蓄積していくものである。また、エピソードは、その時ではなくX氏に意味づけを付与されて初めてエンパワメントやディスエンパワメントに影響を与える。X氏は、自らの糧となりうる「葉っぱ」としてのエピソードを経験することが重要であると考えている。この内容はM-GTA の結果には示されなかったため、モデル図はX氏のエピソード観が反映されていないものである可能性が示唆された。

2つの方法による分析結果を比較した結果、それぞれの結果は概ね共通した結果を示した。M-GTA の結果では示されなかった要素が3点、エピソード記述法の結果により付け加えられた。

(5) X氏のライフストーリーにおけるエンパワメント過程

M-GTA とエピソード記述法の分析結果を総合し、X氏のエンパワメント過程を記述する。モデル図は図3のように修正された。

X氏がエンパワーする仕組みは次のようなプロセスを持つ。①X氏は、ライフストーリー上で他者との間に経験したことをエピソードとして記憶・蓄積する。②エピソードは、X氏によってポジティブなもの・ネガティブなものという意味づけがなされる。③ポジティブな意味づけがなされたエピソードは、考え方・意識の変化などを生じさせX氏に影響を与える。④X氏が持っている自信⇄行動⇄経験のサイクルがエンパワーを促進するように作用する。⑤ネガティブな意味づけがなされたエピソードは、X氏がディスエンパワメントに向かうように作用する。

注意すべき点は、X氏のエンパワメント・ディスエンパワメントへの変化はエピソードが経験されたその時に起こるものではないことだ。つまり、X氏がポジティブな経験をしていてもネガティブな経験をしていても、その経験が直ちにX氏に変化をもたらすわけではない。エピソードをエンパワメントの糧とするか否かはX氏

が決定している。働きかけによって X 氏のエンパワー／ディスエンパワーはコントロールできない。

以上のプロセスは、X 氏を木、エピソードを「葉っぱ」として、木の成長に例えることができる。X 氏は、「そのうち栄養になる」「葉っぱ」をかけられることで自らの内部にあるしくみを働かせてエンパワーする。

IV. 分析方法の評価と課題

本研究は、障害のある人の生活史についての語りからその人ならではのエンパワメント過程をわかりやすく記述するための分析方法を検討・試行した。M-GTA、エピソード記述法を用いて調査協力者のエンパワメント過程を記述した。

実際に事例を分析した結果、M-GTA とエピソード記述法は、今回の分析では調査協力者のエンパワメントのメカニズムを示すことができた。M-GTA とエピソード記述法は、分析結果は概ね類似していたが、表現しやすい内容が異なる。M-GTA は、筆者が読み取った X 氏のライフストーリーを通底する X 氏がエンパワーしていく仕組みを大まかなモデルとして提示することができた。類似するデータをカテゴリー化していくことによって、データ全体が示すメカニズムを記述できるのは M-GTA の強みだといえる。エピソード記述法は、1 つの重要なエピソードを重点的に考察することで、筆者が読み取った X 氏が持つ考え方・価値観・エンパワメント過程との関係を記述することができた。類似のデータの多少に拘らず、重要な語りの意味を掘り下げることができるのはエピソード記述法の強みだといえる。そのため、結果を組み合わせることでよりその人らしいエンパワメント過程を記述できる可能性がある。

ただし、この分析方法は 1 事例のみ試行しており、考案した者しか実施していない。ほかの調査協力者の事例やほかの研究者の場合でも効果的な記述が可能であるかは本研究では判断できない。以上が本研究の課題といえる。筆者が他の調査協力者の事例をこの方法で分析することや、他の研究者によってこの方法が使用されることによって、当事者の個別性を表現できるエンパワメント過程のより良い記述方法が検討されていくことが必要である。

本研究の結果からは少なくとも、ある人のライフストーリーからエンパワメント過程を記述するには、M-GTA、エピソード記述法を単一で実施するよりも、両方実施するほうが、調査協力者のエンパワメント過程について多くの要素を明らかにすることができる。その人らしいエンパワメント過程を表現し、かつ、分析者の解釈をわかりやすく伝えるためには、M-GTA とエピソード記述法を組み合わせる方法が効果的だと考える。

謝辞

本研究の事例検討にあたって、ライフストーリー・インタビュー、分析結果のご確認、分析結果の開示にご協力ご承諾いただきました X 氏に感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) Robert Adams(2003) Social Work and Empowerment: Thied Edition, Palgrave Macmilan (=2007, 杉本敏夫・齊藤千鶴監訳『ソーシャルワークとエンパワメント—社会福祉実践の新しい方向—』ふくろう出版)
- 2) 岩川奈津・都築重幸 (2017) 「社会福祉領域におけるエンパワメント概念の枠組みと障害種別のエンパワメントの内容の検討」『障害者教育・福祉学研究』13, 55-66
- 3) 木下康仁(2007) 『ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 4) 鯨岡峻 (2010) 『エピソード記述入門 実践と質的研究のために』東京大学出版
- 5) 小西友七・南出康世(2007) 『ジーニアス英和辞典 第4版』大修館書店
- 6) 小松源助(1995) 「ソーシャルワーク実践におけるエンパワメント・アプローチの動向と課題」『ソーシャルワーク研究』21,(2),4-10
- 7) 桜井厚・小林多寿子編著(2005) 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房
- 8) 武田康晴(2005) 「発表会：障害者のエンパワメントの視点と生活モデルに基づく具体的な地域生活支援技術に関して 第二部『身体障害者のエンパワメント過程』」『平成 17 年度厚生労働科学研究障害保健福祉総合研究成果発表会報告書』DINF 障害保健福祉研究情報システムホームページ (<http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/kousei/h17happyo/shintai.html> 2017.12.19)
- 9) 辻京子・大西美智恵(2012) 「思春期に中途視覚障害となった A 氏のエンパワメントの軌跡」『日本保健福祉学会誌』18(2)29-37
- 10) 橋本卓也・岡田進一・白澤政和(2008) 「障害者のセルフ・エンパワメントの内的生成要因について—自立生活を送る重度障害者に焦点をあてて—」『社会福祉学』48(4)105-117